

詩人屈原 其二：論説

著者	兒島，献吉郎
雑誌名	龍南會雜誌
巻	8 8
ページ	2 3 - 2 9
発行年	1901-11-24
URL	http://hdl.handle.net/2298/5238

隊は、千八百五十四年、正月を以て、黒海に入り、越えて二月、英國は最後の通牒を露國に送り、此の時、閣議二に別れ一は首相並に虞翁の徒にして、出來得る限り、戰を避け、以て土國の耶蘇教徒の安全を保護するを主とし、一はバルマーストーン卿の徒、換言すれば、卿の土耳其保全を主張するは、英國國民たる者の一義務なりとの言を奉し、一戰以て露國を倒し、土國を保全せんことを欲するの徒なり、然り而して露國は終に、英國の最後の通牒に答へざりしを以て、英國は三月を以て、露國に戰を宣し、十一月、インケルマン、バラクラバの役に於て、英國の輕騎隊は、欽定詩崇の爲めに、其名を留めたるも全軍利を失ひ、アバーテーン内閣望を失ひ、バルマーストーン卿代て内閣を組織せり、此れ卿の第一回内閣なり。《完》

詩人屈原

其二

教授 兒島 猷 吉郎

凡そ人身中、純潔にして貴ふべきは血と涙とぞかし。古來幾多の志士、勇士の行動は皆熱血に基因し、詩人文人の筆の迹には涙の痕の留まるもの多し。思ふに人の勇膽義烈、事に當りて屈せず、物に應じて懼れざるは血なり、慷慨、淋漓、憤悱、激越、進んで取り、取りて代るも亦血の作用なり。惻隱の情は涙の源泉なり。博愛の仁は涙の潤澤なり。多恨多戀は涙の反影なり。故に眼底に涙なきの人は常に刻薄にして不仁なり。皮裡に血少き人は槁木の如く、死灰の如く、冷淡枯瘦に失するにあらざれば、必ず儉懦因循に陥らん。而して美人一滴の涙は時に勇士の鐵腸を銷鑠し、勇士満身の血は彈雨硝煙を物ともせずして、能く千軍萬馬の間に出入せしむ。しかも又涙多きは美人のみなら

論

す、鬼を欺く英雄の眼にも涙あるなり、血多きは勇士のみならず、天祕を鑿ち、神鑰を啓く詩人の腸にも亦血あるべきなり。血なき詩人の詩は浮辞空言にして到底神人を感動するに足らず、涙なき英雄の行動は暴虐猛戾至らざる所なけん。げに涙の潔白は以て玉露の清に比すべく、血の純精は以て眞珠の紅に喩ふべきなり。試に之を古の詩歌に徴せんか、箕子麥秀の歌は涙の中に生じたるものに非ずや。荊軻易水の歌は血氣の溢れたるものに非らずや。即ち屈原の如きも亦多涙多恨にして、皮裡に熱血は迸り眼底に紅淚溢る、ものなり、宜なるかな彼の著作が能く千載の下に傳誦せらるるや。請ふ其著作に就て評論せん。

說

二、彼の著作。古來詩人の大著作は、多くは順境に成らずして、反て逆境に作るものなり。蓋し逆境に在れば、意氣激して熱血迸り、情思湧きて紅血溢ると雖も、順境に在るときは、志滿ち意足り氣焰銷沈して揚らず。故に順境の詩人は詞意平緩に失するに非ざれば散漫に陷るものと雖も、逆境の詞人は概して文氣氤氳として湧くが如く、或は懣へ、或は愁ひ、或は怨み、或は悲み、曲折反覆、盡さんと欲して盡さざる妙あるなり。凡そ詩人に不平家多き所以は、不平心變して詩思と爲れはなり、即ち詩人に不平家多きに非ずして、不平家が多くは詩人となれるのみ。これぞ世に詩人窮多くして達少き所以にして、歐陽修が窮して然る後王なりと言へる所以ならんか。屈原の二十五篇も亦不遇不平より作りしものなり、司馬遷の所謂屈原の離騷は怨より生ずとは至當の言なり、宜なるかな彼の著作は巨海の汪洋たるか如き觀なしと雖も、情緒纏綿にして一意反復の妙は、溪流の噴薄たるが如き趣あり、之を司馬相如などの作に比すれば曲折の妙多しと雖も、局面擴開の妙は却て相如に一等を輸するものに似たり。

彼は本來詩人を以て自ら期圖するものに非ず、しかも彼が詩人としてその名を百世に遺すものは、時勢境遇自ら然らしむるなり、若し詩人として彼は何如なる位地に立つべきものなるかを尋ねんか、彼は詩經三百篇以外に一派を立て、一流を開きたるものにして、實に賦騷の祖なり。當時宋玉、唐勒、景差の徒已に其流を酌めるのみならず、漢以後に泊ひて賈誼、淮南小山、東方朔、嚴忌、王褒、劉向、王逸は勿論、司馬相如の長門賦、哀二世賦、班婕妤の自悼賦、楊雄の反離騷、張衡の思立賦、王粲の登樓賦、韓愈の復志賦、閔已賦、柳宗元の徵咎賦、閔生賦、吊屈原文、李翱の幽懷賦など皆その範型を二十五篇に取らざるはなし。彼は實に文學上創業の大祖と謂ふべきなり。

彼の著作は原と幾許篇ありしか詳ならずと雖も、賦二十五篇なりしこと、漢書藝文志に見えたり、されば班固の時に屈原の著作として存存せしものは二十五篇に過ぎざりしなり、今楚辭中に於て屈原の作と稱せらるるものは、離騷、九歌（十一篇）天問、九章（九篇）遠遊、卜居、漁父の二十五篇なり、こは王逸、朱熹等皆然らざるはなし、たゞ明の黃文煥、及び清の林雲銘は招魂、大招三篇を増入して屈原の作と爲せり、これ畢竟漢書藝文志に稱する所の篇數よりは更に二篇を増加したなり。識らず漢書を以て誤謬なりとせんか、將た黃林二氏の説を以て妄見なりとせんか、惟ふに漢書は固より誤謬に非ざるへしと雖も、黃林二氏の説も亦理由なきに非ず、何となれば遷史の屈原傳論贊に余讀離騷天問、招魂、哀郢とあるによりて之を見れば、司馬遷も亦招魂一篇を以て屈原の作と見做しとなり、大招篇の作者に至ては、王逸亦已に屈原か景差かを疑へり、然らば招魂大招三篇を以て屈原の作と見做すことは、決して黃林二氏の創見に非ずして、漢代の學者已に其意見を持つるものありしを知るに足るへし、然れども予は班史を訂して二十七篇と爲さんとするものに非ず。

清儒顧成天は九歌十一篇中の湘君、湘夫人を合せて一篇と爲し、また大司命、少司命を并せて一篇と爲し、以て九歌の數に合はしめたるか如き、又清の劉夢鵬は九章中の抽思、橘頌二篇の名目を刪りて、哀郢篇に合併したる如き皆舊來の篇數を減して二十三篇と爲すものなり、乃ち招魂、大招二篇を屈原の作中に増入するも、亦班史の篇數に照して更に剰加することなし。然れども若し予をして武斷的に判斷を下さしむれば、余は卜居及び漁父辭を以て後人の筆と爲さんとす、何となれば卜居及び漁父辭は歴史家の敘事的筆法にして、詩人の自叙的筆法に非ず、見よ二篇共に屈原既放の四字を以て起首と爲し、又其篇中の問答にも屈原の二字を用ひ、決して余の字若くは吾の字を用ひざるは他篇に比して違例なり、尤も古文には此の如き變格を用ふるものなきに非ざるへしと雖も、自己の行事を敘述するに、自己の姓名を連用するは、拙の最も拙なるものなり。論者或は漁夫辭を以て莊子の漁夫篇と同工なりと云ふものあれども、こは全く立言の體を殊にせり、且卜居の篇は文章として尙ほ取るべきものありと雖も、漁夫の辭は行文措語の間に古人の成語を剽竊せるもの多し、見よ中段の語句は荀子の不苟篇に取り、末段の歌は孟子に取るを。故に漁夫辭一篇は司馬遷の筆藻に成れりとすれば固より名文なりと許すに吝ならずと雖も、屈原の作なりと曰はゞ最も拙作なりと謂ふを憚るなり。顧成天曰はく卜居は戰國人の僞作なりと。而して漁夫辭に對して彼は未だるの僞託たるを知らざるもの、如し。劉夢鵬は漁夫、懷沙と合せて一篇と爲して漁夫滄浪の歌を刪り去れり、これ亦漁父辭の疑はしきを知るものなりと雖も、未だ屈原の筆に非すと斷言すること能はざりしなり。要するに九歌十一篇中の二篇を他に合併するか、將た九章中の二篇の名目を刪除せんか、若くは卜居及び漁父辭を屈原の筆に非すとすれば、招魂大招二篇を屈原の作として増入するも、班

史の篇數に照して齟齬することなきなり。顧成天曰く招魂大招は皆懷王を招けるものなりと、或は然らん。

三、彼の著作と詩經との比較。彼は文學者として當時第一流に立つは勿論なり、試に彼の著作廿五篇は詩經に比して如何なる關係を有するか、如何なる態度を取りしか、三百篇以外に新に機軸を出だしたる所あるか、將た三百篇の故轍を履みたるかを論せんに、詩經三百篇は固より一人の作に非ず、又一時の作に非ず、各國各人が各時代の思潮を發舒展開したるものなれば、その詞章心影は、國に由り、人に由り、時代に由りて種々別々なりと雖も、屈原の作は何れも短日月の間に成り、しかも同一事實の下に屬するものなれば、その趣向は自然一律ならざるを得ず、その聲調も亦自ら同一ならざるを得ず。故に詩經は多趣味なりと雖も、屈原の作は諸詩一律の憾なきに非ず、これ一人の作と、多人數の作との相違なれば、決して屈原の文學的技能の如何を卜すべきに非らざるあり。

論者或は屈原の文辭往々激厲に失する所あるを嫌ひて、詩人敦厚の意に非すと云へり、これ未だ詩人の意を知らざるのみならず、亦詩の何物たるを解せざるものあり。試に思へ詩經三百篇は皆無邪の思より成りたるものに非ずや、然るに或は雄狐を以て君を誹り、或は雄雉を以て君に喩ふ、識らざる論者は亦詩人敦厚の意を失せりと謂はんか。屈原の作の如き固より君を思ふの餘に成りたるを以て、時に或は君を怨みたるが如き口氣ありと雖も、亦實に無邪の思より出でざるはなし、然るに班固は才を露はし己を揚ぐるこて之を譏り、顔之推は君の過を暴露せりとて之れを毀れり、若しその辭のみに拘はりて其意の在る所を察せざれば、三百篇の詩中亦才を露はし己を揚けたりと見做すべきものあらん、君の過を暴露せりと稱すべきものあらん、二氏の説は皆詩人の溫柔敦厚の旨を察せ

さるのみならず、亦實に詩可以怨の義を知らざるものなり。若し其意の在る所を察すれば、言卒の罪無く、聴くもの戒むるに足ると雖も、單に其辭のみに拘泥するときは、雲漢の詩は果して如何に解釋すべきか、故に予は二十五篇の作者の精神は、三百篇の詩人の意思と同一と曰はんとす。決して兩者の間に優劣を定むべきに非ず、

若し三百篇と二十五篇とを比較して、その特殊なる點を擧ぐれば、三百篇は一句としては概して三四字、一章としては概して三四句、一詩としては概して三四章に過ぎざれども、廿五篇は一篇として長きは二千餘言、一章としても長きは二百餘言、一句としても概して六七字を下らす。これ江邊と河邊と、風土言語の異りあるに由るへしと雖も、亦文學上の一轉化と謂はざるを得ず、蓋しこの轉化は短句が長句に進み、短篇が長篇に進み、單純の聲調が緩急曲折の聲律に變したる者なれば、若し之を六律五聲八音に合せて高歌朗吟するときは、三百篇の急脉にして短調なるは、廿五篇の緩急相生する者に如かさるへし、しかも其情思に至りては、廿五篇の剗切なる、最も人心を感動するに足れり、乃ち其聲を聞かば、其人を追想して、心動き魂悲み、覺へず雙眼に熱淚の滂沱たるあらんのみ。孔子嘗て詩を稱して詩可以興、可以觀、可以群、可以怨、邇之事父、遠之事君、多識於鳥獸草木之名と云へり、されば詩は興觀群怨の功用あるのみならず、之に由りて人倫の大義を領解し、又多く鳥獸草木の名を識るを得るの便ある者也、是れ三百篇の功德なり。今廿五篇は果して何如なる功德を有するかと謂はば、廿五篇は物に觸れては興懷の意を寓せ、事に激しては感慨の情を致せる者にして、忠君愛國の情亦其紙表に躍如たるなり、故に其辭を反復諷誦して、能く其情思を咀嚼するときは、人をして覺へず潛然として一灑の紅淚を揮はしむ。漢の淮南王は離騷が小雅、國風の品質を兼ねたりとて、國風好色

而不淫、小雅怨誹而不亂、若離騷者可謂兼之矣と稱せり。乃ち二十五篇も亦興觀群怨の徳を具へ、人倫の大義を表示したるものなるや明白なり、故にこの一事は三百篇廿五篇も同一の資格なりと謂ふべし。且多く草木鳥獸の名を識ることは、固より第二の目的に屬して、詩の主眼に非すと雖も、屈原の作の如きも、多く草木鳥獸の名を識るの便あること、決して詩經に譲らざるなり、梁の劉杳、宋の吳仁傑、及び明の屠本峻は皆離騷草木疏を著はせるを以て察すれば、離騷が如何に多く草木を引擧せるかを知るに足るへし、特に吳仁傑は離騷の文に奇々怪々の處ありと雖も、決して空に架して辭を設けたるものに非ず、實に山海經に本けるものなりとて、書中の引證に屢山海經を引きて斷案を爲せり。顧ふに離騷が果して山海經に本げるや否やは、未だ容易に信すへからずと雖も、亦彼の賦する所の如何に博瞻該洽なるを知るに足らん

人格的宗教とヒューマニチー

吉 田 修 夫

人格の實在とヒューマニチーの眞價

如述の人格は。實に天にも地にもあらざる尊嚴なる勢力なり。この勢力ある時は、人間の腦中に生じ来るあらゆる忘念邪慾は、容易に抑制することを得るなり。然れども是の主宰力なき時は、即ち其の者に人格嚴然としてあらざれば、死物と同様なり即ち本我の滅亡したるものなり。

斯くの如く人間彼自身の生殺與奪は、實に之の人格實在の有無（元ど人格は人間各自に賦與されたるも是には或意味にて使ふ）による。眞に吾人は之の人格なる主宰力に對しては、決して抵抗する